

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成18年度病虫害発生予報第4号について
平成18年度病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

平成18年度病虫害発生予報第4号

向こう1か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	本文の記 載ページ
普通期水稻	葉いもち	並	2
	紋枯病	並	2
	ツマグロヨコバイ	並	2
	セジロウンカ	やや多	2
	トビイロウンカ (注意報参照)	多	2
	コブノメイガ (注意報参照)	多	3
野菜類全般	アブラムシ類	やや少	3
	ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗翅目)害虫	並	3
	タバココナジラミ類	—	3
	(タバココナジラミハイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ) (防除情報参照)		
トマト	トマト黄化葉巻病(TYLCV) (防除情報参照)	—	4
カンキツ	かいよう病	多	4
	黒点病	並	4
	ミカンハダニ	やや多	4
	チャノキイロアザミウマ	並	5
チャ	炭疽病	並	5
	もち病	やや多	5
	チャノコカクモンハマキ	並	5
	チャハマキ	並	5
	チャノホソガ	やや少	5
	カンザワハダニ	並	6
	チャノキイロアザミウマ	並	6
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	6
クワシロカイガラムシ	並	6	

○ 作物の生育状況(7月中旬)

普通期水稻は分けつ初期、温州みかんは果実肥大期、茶は三番茶の摘採前であった。

○ 8月の気象予報

気温は平年より高い、降水量、日照時間は平年並と予想されている。

(1か月予報 鹿児島地方气象台7/21発表)

「ポジティブリスト制度」が始まりました。
農薬のドリフト防止に努めましょう。

○ 発生予報の根拠および防除対策

普通期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の葉いもちの発生面積率11.9%（平成22.9%）、発病株率4.1%（平成8.3%）はいずれも平成並である。
- 2) 8月の気温は平成より高い、降水量は平成並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 葉いもちの見られるほ場では早めに防除する。
- 2) 穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、粉剤または液剤による穂ばらみ後期と穂揃期の防除を徹底する。

2 紋枯病（並）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 8月の気温は平成より高い、降水量は平成並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) イネの抵抗性が低下する幼穂形成期から穂ばらみ期にかけて上位葉鞘に進展するので、防除は穂ばらみ期に行い、その後も上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の防除を実施する。

3 ツマグロヨコバイ（並）

- 1) 7月中旬の発生面積率42.9%（平成33.8%）は平成よりやや多、20回すくい取り虫数0.9頭（平成1.4頭）は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 萎縮病、黄萎病を媒介するので注意する。

4 セジロウンカ（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率100.0%（平成73.2%）は平成より多、20回すくい取り虫数50.8頭（平成24.9頭）は平成よりやや多である。
- 2) 6月下旬～7月上旬まで梅雨前線の活発な活動による下層ジェット気流の発生で九州全域で多数の飛来が確認されており、本県においても特に7月5～6日に都城市の予察灯で過去10年中でもっとも多い飛来が認められた。

[防除上の注意]

- 1) 幼穂形成期頃に多発生すると吸汁による生育抑制、下位茎葉の黄変枯死、出穂の遅れが生じるので、発生状況を見て若齢幼虫期に防除する。

5 トビイロウンカ（多）

平成18年度病害虫発生予察注意報第4号（平成18年7月25日発表）参照

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率14.3%（平成1.9%）は平成より多、株あたり虫数0.01頭（平成0.00頭）は平成よりやや多である。
- 2) 延岡市、都城市、宮崎市（佐土原）の予察灯において、7月第2～3半旬の時期にまとまった飛来が確認されている。

[防除上の注意]

- 1) 少ない飛来量でも増殖率が高く、坪枯れ等大きな被害が生じるため、長期残効型の箱施薬を行っている場合でも、ほ場での増殖に注意し、7月下旬～8月上旬頃の防除を徹底する。（要防除密度は短翅型雌成虫が株当たり0.2頭）

6 コブノメイガ (多)

平成18年度病害虫発生予察注意報第5号(平成18年7月28日発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 7月下旬の発生面積率93.3%(平成58.1%)、被害株率33.4%(平成10.4%)はいずれも平成より多である。
- 2) 早期水稲地帯でも平成に比べて多い発生であった。
- 3) ライトトラップでは、都城市で6月中旬に9頭(平成同期4.9頭)、えびの市で7月2~3半旬に45頭(平成同期51.3頭)のややまとまった飛来が確認された。

[防除上の注意]

- 1) 7月下旬の幼虫齢期調査から、発蛾最盛期は8月5~9日頃と予測される。
- 2) 防除適期は、粒剤を使用する場合は発蛾最盛期で、液剤や粉剤等を使用する場合は幼虫ふ化期(発蛾最盛期の約1週間後)である。

野菜類全般

1 アブラムシ類 (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップ(佐土原)での誘殺数は平成よりやや少なく推移している。

[防除上の注意]

- 1) 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

2 ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗翅目)害虫 (並)

[予報の根拠]

- 1) ハスモンヨトウのフェロモントラップでの誘殺数は、都城市、西都市では平成並、宮崎市(佐土原)では平成よりやや少ない傾向である。
- 2) タバコガのフェロモントラップ(西都市)での誘殺数は平成より少ない。
- 3) オオタバコガのフェロモントラップ(西都市)での誘殺数は平成よりやや多く推移している。
- 4) 8月の気温は平成より高い、降水量、日照時間は平成並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

3 タバココナジラミ類(シルハ-リーフコナジラミ、タバココナジラミバイオタイプQ) (-)

平成18年度病害虫防除情報第4号(平成18年7月24日発表)参照

[防除上の注意]

- 1) 野外での誘殺数が増加傾向にあるので、露地栽培、家庭菜園等での発生にも注意し、防除に努める。特に、次期作の育苗ほ周辺では厳重な警戒を行う。
- 2) 近年、果菜類(主としてトマト・ピーマン)を中心にコナジラミ類の寄生が増加傾向にあるが、多くの品目において、各種薬剤に対して感受性の低いタバココナジラミバイオタイプQが発生していることが確認された。
- 3) 有効な薬剤に対する抵抗性発達を回避する観点から、連用は極力行わず、ローテーション散布を心がける。
- 4) 施設栽培では目合の細かい防虫ネットを必ず設置するとともに、反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の農薬に依存しない物理的防除手段を利用する。

トマト

1 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

平成18年度病害虫防除情報第4号(平成18年7月24日発表)参照

[防除上の注意]

- 1) 病原ウイルスは、シルバーリーフコナジラミ、タバココナジラミハイタイプQによって伝染されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。また発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- 2) 育苗前にコナジラミ類の増殖源となる周辺の雑草は除草する。
- 3) 育苗期に感染すると被害が激しく全滅する場合もあるので、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、育苗・栽培施設の開口部には、0.4mm目以下の防虫ネットを設置するとともに、育苗期間中の防除を徹底する。
- 4) 育苗ハウスに黄色粘着板を設置し、密度低下に努めるとともに、媒介虫の発生が確認された場合は、すぐに殺虫剤の散布を行い徹底的に駆除する。

カンキツ

1 かいよう病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の春葉調査では、発生面積率45.0%(平成19.4%)、発病葉率7.2%(平成1.3%)はいずれも平成より多である。
- 2) 7月中旬の果実調査では、発生面積率30.0%(平成4.8%)、発病果率1.6%(平成0.3%)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

- 1) 発病した枝葉は伝染源となるので可能な限り取り除き園外に持ち出して焼却する。
- 2) 風雨による枝葉の損傷を少なくするため防風垣を整備する。また台風の襲来が予想される時は事前に薬剤散布を行う。
- 3) ミカンハモグリガの被害も重要な病菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場では防除を徹底する。

2 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の巡回調査では、果実での発生は未確認であるが、枯れ枝・罹病葉が散見される。
- 2) 6月中旬春葉での発生面積率25.0%(平成28.4%)、発病葉率4.6%(平成5.8%)はいずれも平成並であった。
- 3) 8月の降水量は平成並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 伝染源となる枯れ枝は、可能な限り除去し園外に持ち出して焼却処分する。
- 2) 雨が多いと多発する恐れがあるので、積算降水量300mm毎又は1か月おきに薬剤散布を行う。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率60.0%(平成36.8%)は平成より多、寄生葉率4.9%(平成4.9%)は平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%(1葉当たり虫数0.5~1頭)を目安に防除を行う。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の巡回調査では発生未確認である。

[防除上の注意]

1) 密度が高くなると防除が困難になるので、1果当たり虫数0.3頭を目安に防除を行う。

チャ

1 炭疽病 (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率47.1% (平年54.5%)、 m^2 当たり病葉数5.5 (平年4.7)はいずれも平年並である。

2) 8月の降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

1) 新芽の生育期に雨が多いと発生しやすい。開葉期に防除を行い、多発生が予想されるときには追加防除する。

2 もち病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の発生面積率17.6% (平年5.8%)は平年並、 m^2 当たり病葉数1.4 (平年0.2)は平年より多である。

[防除上の注意]

1) 秋芽の生育期に雨が多いと感染しやすい。特に中山間地域では発生が多いので秋芽の生育期に薬剤散布をする。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の巡回調査では発生は認めていない。

[防除上の注意]

1) フェロモントラップ調査では、都城市、三股町での発蛾最盛期は7月下旬、宮崎市(田野町)では8月上旬と予想される。

2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の巡回調査での発生面積率11.8% (平年7.1%)は平年よりやや多、 m^2 あたり虫数0.2頭 (平年0.2頭)は平年並である。

[防除上の注意]

1) フェロモントラップ調査では、都城市、三股町及び宮崎市(田野町)の発蛾最盛期は8月上旬と予想される。

2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

5 チャノホソガ (やや少)

[予報の根拠]

1) 7月中旬の巡回調査での発生面積率5.9% (平年30.6%)は平年より少、 m^2 あたり虫数0.1頭 (平年0.6頭)は平年よりやや少である。

[防除上の注意]

1) フェロモントラップ調査では、都城市、三股町及び宮崎市(田野町)の発蛾最盛期は7月下旬頃と予想される。

2) 発蛾最盛期の7~10日後が防除適期である。

6 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の発生面積率17.6%(平成16.0%)、寄生葉率0.4%(平成1.5%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の払い落とし調査による発生面積率41.2%(平成57.1%)、払い落とし虫数4.1頭(平成7.5頭)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) この時期は卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、とくに蛹は地表面において防除効果が低いので残効性のある薬剤か1週間間隔での連続散布を行う。

8 チャノミドリヒメヨコバイ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の見取り調査による発生面積率35.3%(平成41.6%)は平成並、寄生葉率0.8%(平成4.6%)は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) チャノキイロアザミウマとの同時防除とする。

9 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- 1) 7月中旬の巡回調査では発生面積率11.8%(平成16.5%)、寄生株率0.2%(平成3.5%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 最近、増加傾向にあるので早期発見に努める。(周縁部から発生しやすい。)
- 2) 防除適期は幼虫ふ化開始から1週間後、または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。
- 3) 薬剤散布は、枝幹に十分かかるように適切な量をていねいに行う。

○ 農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病虫害防除・肥料検査センターもしくは最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。

3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- 2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- 3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp